

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 31



大洲 稻荷山公園

特 暮らしと文化 集

『芸術文化とまちづくり』

- 「アートのある里」の癒りない面々
- 「森の国」のアートを求めて
- 『まちが美術館』
- 魅力ある都市景観の創造を目指して
- 壁画の島

アングル

基盤づくりとまちづくり…………… 大三島町長/菅 省三…………… 3

特 暮らしと文化 集

『芸術文化とまちづくり』

「アート」の里」の懲りない面々…………… 砥部町/矢野徹志…………… 4
 「森の国」のアートを求めて…………… 松野町/坂本 浩…………… 6
 大好きです！西条。『まちが美術館』…………… 西条市/塩崎賢三…………… 8
 魅力ある都市景観の創造を目指して…………… 今治市/浅川文雄…………… 10
 壁画の島…………… 関前村/吉田光枝…………… 12

論談 ーまちづくりー

過疎地域の再生について考える(Ⅱ)…………… 松山大学経済学部長/村上克美…………… 14

レポート

第八回水郷水都全国会議…………… 16
 全国自治体政策交流会議・全国自治体学会…………… 18

地域づくり研究会議から

地域づくりのベースを求めて…………… 五十崎町/宮本俊一…………… 20

ふれあい広場

リレーでちょっとーク(津島町・松山市から)…………… 22
 元気印レポート(大西町・川之江市から)…………… 24
 <狸で町をかきまわせ>
 <川之江見聞観察会「かぁーねみてみんない」>

Information

媛のくにフラッシュ…………… 28
 <宇和島市・美川村・明浜町・別子山村・日吉村・愛媛県>
 TOWNタウン通信…………… 31
 地域づくり研究会議からのお知らせ…………… 32

特集「暮らしと文化」

今回のテーマ

「芸術文化とまちづくり」
 今回の特集では、前回に引き続き『暮らしと文化』の第二弾として、日々の営みの中にさりげなく、そして着実に浸透しつつある「芸術文化」にスポットを当てることにしました。

今、時代は「効率」や「経済」優先の社会から「ゆとり」や「やすらぎ」を大切に社会へと確実に変化しています。このような大きな変革の中で、最近、地域においても「芸術」に視点を置いた様々な取り組みや動きが見聞きされるようになってきました。

一口に「芸術」といっても、その手法により文芸、絵画、彫刻、音楽など多種多様なスタイルがありますが、いずれも「美」の創作・表現活動でありますから、美しく、快適なまちに住みたいとの願いのもとに進める「まちづくり」活動とは相通するものがあるはずですから、今回登場していただく方々の活動は、正に芸術文化を核にしたまちづくりを進めようとするものがあります。

感性(こころ)によるまちづくりについて、考えてみてはいかがでしょうか。

表紙のことは

溪谷に沿う紅葉の美しさは、言うまでもありませんが、大洲稲荷山公園もまた格別です。平山に奥深く重なり合った紅葉は、ヨーロッパ的な雰囲気を感じさせてくれました。その中に、落葉で遊ぶ親子の姿が。微笑ましく、とても印象に残りました。

柳原あや子





行くことにしました。

瀬戸大橋(西瀬戸自動車道)が今世紀中に全線開通の見通しとなったことで、

広島・愛媛の沿線関係各市町村では、全線開通後に対応したまちづくりを模索し、試行錯誤を繰り返している実情であります。

大三島町は、美しい海に代表される豊かな自然と、武器甲冑類を中心に数多くの国宝類を収蔵する大山祇神社を有するため、このルートの中では、尾道市、瀬戸田町と共に多くの来訪者があることは事実でしょう。

その一方で、折角滞留するのに「何か足りない」と、補完施設の不足を訴えられていることも事実であります。このようななかで私は観光的な面での補完と休養地としての新しい方向を求める方策で、当面その基盤づくりを進めて

その第一段階として、島の致命的な問題である生活用水の確保に全力を上げて努力して参りました。

幸い県当局の非常なるご理解とご高配により、平成四年三月には「ダム」が完成し、上水道供給事業も平成五年には全施設が完了する見通しとなり、平成四年七月より一部旧施設と併用しながら、ダムからの取水で関係四町に給水を開始しており、生活用水の不安は取り除かれました。

第二段階は、昭和五十九年度より実施されましたまちづくり特別対策事業への取り組みです。昭和五十九年度より公園事業に着手し、平成元年度までに事業費六億六、三五〇万円余りで「花木の藤公園」「日本画の美術館」「鏡小学校跡利用の少年自然の家」「海浜を含めた宗方小学校跡のふるさと憩の

家の宿泊施設」これを補完する「イナズミ公園」「緑の村運動広場のテニスコート」の整備を進めて参りました。小さい施設ではありませんが、それぞれの施設が好評で年々利用者、宿泊者が増加しており、公園の樹木と共に育ち伸びる施設となっておりますことを喜んでおります。

第三段階としては、リゾート法による重点整備地区の指定を得たことによる、民間企業とタイアップしてのリゾート地としての立地を目指したものであります。しかしながら、実施計画の段階にきて、バブル経済の崩壊により、厳しい見通しとなつて参りました。今後は、従前の

基盤の上に、地域づくり推進事業基金を中心に起債等も加えて、町民の住みよいまちづくり、訪れた人の歓ぶまちづくりに独自のまちづくりを推進したいと考えております。又、環境基盤下水道整備も早期完成を目指して進めております。島の最大の売り物であります海は生活排水や農薬等の流入により、あさり

貝や小魚の育たない海、メダカのない小川となりつつあります。町では、町内大字単位九地域の内、既に完了し供用しております浦戸を除き、平成三年度より、富浦、台、明日地域は特環の公共下水道事業で、宗方は集排事業で、平成四年には大見、肥海が集排事業で何れも着手し、早期完成を目指しております。残りの口総、野々江の二地域も平成七、八年に着手の予定をしており、美しい海や小川を一日も早く取り戻したいと願っております。

遅れておりましたまちづくりへの町民参加も、美術館での大三島美術愛好会の協力、公園の草取りやゴミ清掃への町民の参加、下水道事業において最終処理場の立地場所を地域住民で決定したこと、又加入決定はそれぞれの地域で現在最低八三%、最高九五%となっており、住みよいまちづくりへの住民意識が確実に根づいて来ており、このことが、今後のまちづくりの最も大きな基盤となり、更に前進出来るものと期待しております。

特集

「アートの里」の懲りない面々

砥部町

アートの里づくり会議

代表 矢野 徹志

ボク達は、砥部の里の新たな可能性を探るため、平成元年の夏、「アートの里づくり会議」をスタートさせました。その手始めに住民参加の「第一回アートの里フォーラム」を開催。国際的デザイナーの福田繁雄氏を招き、「如何にしてアートの里は可能か」を問う論議を行いました。以来、毎月定例会を持ち、様々な可能性を討議し、具体策の提案や実践を繰り返してきました。

もともと「会議」発足のきっかけになったのは、国の「ふるさと創生資金」でした。一億円の使い途を、住民から提案しようと、アイデアを持ち寄った町民有志が母体となって結成されました。

既に、砥部の里には二〇〇年以前にも及ぶ砥部焼の伝統があり、最近では、「県立総合運動公園」と「べ動物園」さらには、「砥部焼伝統産業会館」が誕生し、国道筋には洒落たレストラン・料理屋が並ぶグルメの里の町並が出現、美しい里の景観にふさわしいアートフルな環境が形成されはじめております。また、松山空港の国際化、瀬戸大橋や四国的高速道路の延長等、瀬戸内新時代の到来によって、砥部そのものの在り方や役割は、広域的、長期的、質的、量的な方向から発想されねばならなくなっております。

『アート』、それは、「高級化」「個

性化(多様化)、創造性」を包括する二十一世紀のシンボルイメージであります。『里』、それは、山あり、川あり、谷ありの美しい景観を持つおらかな「砥部」の地域イメージです。『アート』と『里』が融合する地域になれば、きっと里が素敵になる」ボク等はそんな地平を夢見ています。

会員の小坂三国(料理店経営)は、「砥部が好き。アートが好き。砥部がアートだらけになったらもっと好き。」とアートの里を表現しました。「里」の景観を保存・演出しつつ、美術館、ギャラリー、民芸館、工房、芸術村等々、アートにかかわる諸々の「コト」と「モノ」を集約させたい。「砥部に行けば(アート)に出会える」彼のフレーズにはそんな願いが込められています。

会議結成当初、そんな夢談義が飛び交いました。ところが、「アトちゃ何ぞ。難解なことじゃ」「そんな大風呂敷広げて、誰が金出すんぞ」「アートの町って、芸術家の町になるんか」「焼きものの町

でええやんか」、そのような「やさき」が広がるようになって「理念」づくりに着手。

そこでボク等は、第一期は夢論議、第二期、理念づくり、第三期、啓蒙、PR、第四期、実践と大筋の活動計画を立て、更に、アートの里づくりの基本構想を作りました。砥部の里全域をアートと出会える里ととらえ、「住んでも訪ねても美しい町」「アートに出会える楽しい町」「アートが展開する創造の町」の三つの理念です。それは、「アート」が住民に根ざしたものとして機能するよう配慮してあり、次の実践として、住民の理解、参加、啓蒙、そして他地域へのアピールを兼ねて、第一回の「アートの里フォーラム」を企画したのでした。福田さんの基調講演は、「私たちの町を考える」というものでした。大上段に構えがちなボク等は身近な話に目が洗われる思いがしました。

第三期。啓蒙策の一環として、情報誌「アートの里」(新聞)を

発行。創刊号では、大内町長を囲む「アートの里はどのようになれば実現出来るか」の座談会を特集（町内六千五百戸に全戸配布、一万部印刷）経費は町の助成金を充てました。第四期の実践論に移行するにあたって、第二回目的「アートの里フォーラム」を企画。湯布



「砥部」を語る会

院から中谷健太郎さん、高見乾司さんから「湯布院の里を作った旗手たち」を招き、「砥部を語る会」を開催。このフォーラムには広島高知からの参加もあり、大変盛り上がりしました。イベントの成功は人数集めと自認していたボク等は、

中谷氏の「百人もの人が集まるフォーラムは本当の事が伝わらない。やる気のある者二、三十人で充分」という地域づくりの論理に、実践期への教訓を得たのでした。このフォーラムの全記録は「アートの里」第二号で特集、全国に向けて発信されました。

第四期。町の現実に分け入って、そこからスタートしよう。会では、その手始めに川登地区から広田村に抜けるバイパス計画の路線を歩くことにしました。同地域は砥部川の上流にあたり、「里」のイメージが濃密に残る場所。道路工事にアート感覚を活かして欲しい。会員達は街道に残る常夜燈、樅の大樹、石垣をマップに書き込みました。また、町並み探訪の道すがら、二十年以上も停止したままになっている川登水車の復活についても協議しました。この川筋には明治から昭和初期にかけて四十基以上の水車がありました。いわば砥部焼の石を砕く、陶郷のシンボルでした。この話は、同地区の福岡繁

昌区長に伝わり、福岡氏の奔走もあって水車所有者の佐川巖氏の決断を得ることになりました。本年七月、地域住民、行政や陶磁器組合の関係者等七十人が参加して、水車復活祭実現の運びとなったのです。将来は、四、五基水車を復原すれば、「水車の里」としてアートの里に、また一つ名所が生まれるとボク等は夢の続きを見ています。

「アートの里」第三号ではこれを集集する予定で計画を進めています。以上我が会の歩みと活動の一端を述べましたが、今も様々なアイデアが定例会で飛び交っています。その会議の一コマ。

※ ※ ※

「景観第一。町を花で一杯にしよう」菜の花の種を播き続ける檜皮孝夫（都市プランナー）。「県立の美術館、デザイン短大用地として、町の土地を提供できんか」宗像陽明、武田道夫のデザイナーコンビ。「窯業団地構想にアートの森や芸術村を」陶芸家酒井芳人。

「住民理解が先決」富内信一（会社員）。「アートの里にギャラリートーム板垣初枝。「料理もアート、何かお手伝いしないと」郷土料理研究の主婦米田公子。「小布施や由布院。アートの里にはそれなりの論理がある。アートの里条例を作る」とい「強力助手青木光利（建築家）。「町の看板、何とかしないと」と嘆く日浦信男（広告業）。「会には和が大事。矢野代表は表に立ちすぎると組織論をぶつ小泉孝平（建設業）。「行政にも出てもらうべきで語ろや」事務局担当日野健三（教員）。広域情報をもちこむ柳田獲（町職員）。伝統産業会館長武本猛。佐野岩見（元商工会会長）。中塚純夫（自営業。若き青年大西潤（陶芸家）等々、次から次へと論議が広がる。とは言え、疲れもあって、やや中だるみの感も（これ本意）。そのうち砥部はアートの里となる。きつと。

特集

「森の国」のアートを求めて

松野町役場

坂本

浩

■山村に芸術を■

日本最後の清流と呼ばれる大河「四万十川」、この滔々たる流れの最初の一滴が生まれる場所の一つに、国立公園滑床溪谷があります。新緑や紅葉など四季折々に美しい変化を見せる鬼ヶ城連山、華麗な水紋を描く雪輪の滝、そして奇岩、巨岩、滑の百態。まさしく滑床は「森の国」と呼ぶにふさわしい仙境であり、訪れる人を優しく包みこんでくれるでしょう。

松野町では、この「森の国」のイメージを前面に、豊かな自然と温かい人情、そして貴重な歴史文化資源を活用して、行政と民間が協力しあって個性的な町づくりを進めています。その中でも、松野

の夏を彩るビッグイベントとしてすっかり定着した「滑床まつり森の国音楽祭」と、リサイクルでオリジナルガラス製品を作製する「森の国ガラス工房」は、ともすれば過疎の町では忘れられがちなアートの風を、身近に感じさせてくれる貴重な存在になっています。

■森の国音楽祭■

夕闇迫る静かな山村に初めて強烈なロックのビートが響きわたったのは、八年前のある暑い夏の日のことでした。このイベントの仕掛け人は、松野町に住む若者達で構成された「松野町まちづくり青年会議」というグループ。会社員や自営業、農林業、公務員といった様々な職種の若者が集まって、



ふる里松野のために何かをやりたい、自分達の力で何かできることはないだろうか、と真剣に考えた結果が野外ロックコンサートだったので。

当時の松野町にはこれといって町外にアピールするものが無く、

天与の大資源滑床溪谷も埋もれたままでした。この現状を打破し、松野町と滑床の名を広め、例え一日だけでも多くの若者に松野町にきてもらおう、そんなまちづくり青年会議会員の期待を込めて「森の国音楽祭」はスタートしたので。けれどもこのような大きなイベントに、何のノウハウも持たない素人集団が挑戦するのですからその道のりは苦難の連続でした。

チケットを一枚一枚手売りし、ステージを自分達で組み上げ、プロダクションとの交渉や駐車場の整理に奔走するなど、まさしくスタッフは産みの苦しみを十二分に味わったことでしょう。しかしこの努力が、森の国音楽祭を町づくりコンサートの先駆者たらしめ、今日まで続く原動力となったのです。しかし、この手作りイベントも、今、大きな転機を迎えようとしています。音楽という若者に最も身近な芸術を使って、多くの若者にふる里の名を知ってもらい、そしてふる里を訪れてもらうことはできました。しかしそれは都会

の音楽をそのまま田舎に持ち込み、人集めをしたに過ぎません。全国共通の音楽を肌で感じるのは素晴らしいことですが、松野町らしさ、森の国らしさを前面に押し出し、ここでしか味わえない感動を創生していく必要があります。借り物の芸術から自分達が創り出す芸術への脱皮、甚だ困難な作業ですが、これが今、森の国音楽祭に与えられた唯一の生き残り戦略であると思われまます。

■森の国ガラス工房

次に、松野町が地域おこし、活性化対策の先導的事業として取り組んでいるガラス工芸・リサイクル事業（森の国ガラス工房）についてご紹介します。

このガラス工芸・リサイクル事業は、いま若者や女性を中心に国際的な脚光を浴びつつある「ガラス工芸」と世界的な深刻かつ緊急的課題、環境浄化の一分野である資源再利用「ガラスリサイクル」の組合せによる新しい取り組みであり、観光開発と産業おこし、商店街の活性化、人材の養成、環境

問題への先駆的なモデルパイロット事業など、魅力ある町づくりに寄与しようと進めているものです。

ガラス工芸品には、透明感、神秘性、そして夢やロマンがあり、本町の緑豊かな自然、清流のイメージにもマッチします。

四国西南地域には、本格的なガラス工房はなく、従来なかった分野を導入することで、新たな物と人の交流を興し、松野町に新しい文化が創造されるものと大いに期待もされています。

■リサイクル・ガラス工芸

松野町では年間約八十ト、一週

間に一・五トのガラス類が廃出されていますが、この町内の各家庭から廃出された不燃物の中の空びんをリサイクルカーで回収し、色別選別、栓取り浸水、その後ラベル取り、洗浄を行い粉碎という工程で作業が行われます。

この工房の施設、設備は、旧業たばこ乾燥場の建物（七〇〇平方メートル）を改装し、そこに工房、加工室、体験室、倉庫、ショールーム、ホールなどを設け、ガラス熔解炉、再加熱炉、除冷炉二基、遠心成形機、研磨機、切断機、サンドブラスター機などを設置して、今年の一月三十一日にオープンし、八ヶ月が経過したところです。

この間、土、日曜日を中心に、五月の連休、夏休み期間中には、県内はもとより県外からも大勢の方に来館いただきました。

運営面では、ガラス工芸技術者二人を嘱託員として迎え、助手、販売員等も配置して経営にあたっています。

そして館内では、リサイクル原料を主としたオリジナルガラス製

品づくりや、土・日曜日を利用してガラス工芸教室（受講料が必要素）、工房での実演の見学、観光客や小中学生等を対象とした体験コーナー（有料）、ショールームでのガラス商品等の展示、販売（工房オリジナル商品、国内外の千六百種類に及ぶガラス商品、地域特産品、手づくり品等）を行っています。

今後の課題としては、地域特産品と結びつけた新商品の開発、人材育成、第三セクターへの経営移行、さらに土木建築材や装飾品、園芸用品の開発、若者が定着できる地場産業の育成といった大きな問題といえます。

○森の国ガラス工房

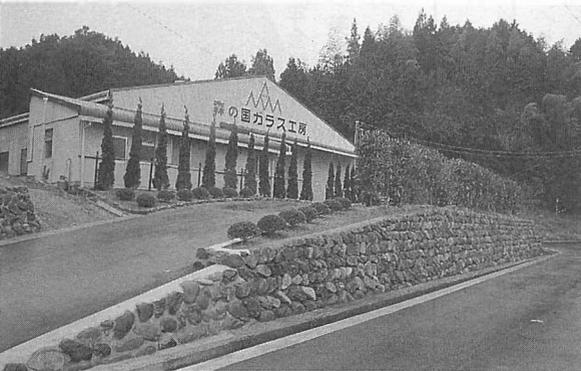
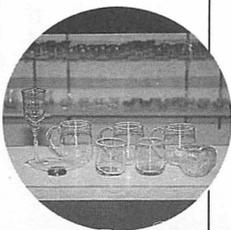
・休館日

毎週月曜日

・開館時間

午前九時

午後五時



特集

大好きです！西条。

『まちが美術館』

(社)西条青年会議所

まちが美術館特別委員会委員長

塩崎 賢三

西条の未来に願いを込めて

私達(社)西条青年会議所のメンバーは、西条が大好きで、このふらさとが将来にわたって豊かな街であり続ける事を願っています。

そんな願いを込めて本年、『まちが美術館』という事業を進めています。

この『まちが美術館』では、全国の絵画に関心を持ち、油彩画を描く人々から西条の四季折々の自然や町並み、市民の生活や風俗などを題材とした油彩画を公募します。応募作品は人々がたくさん集まる施設や商店街などの市内各所に展示し、市民に絵に表現された西条を鑑賞して頂くものです。市民センターを初め、銀行、郵便

局そして商店街の店頭ショーウィンドウを使用しての絵画展示は、街全体を絵画の美術作品で埋めつくす、文字どおり『まちが美術館』という訳です。

アートの中新発見

今回は二回目ですが、前回、私たちが驚かせた作品がいくつかありました。

その一つが北浜の漁港の風景です。ここは家並みが重なり合うように建て込み、そのすき間を走る道には、そここの軒先まで網や浮きなどの漁具が置いてあります。港は入江が細く入り込み、入江の両側に小さな漁船が触先を揃えて所狭しと並んでいるところで、一



般には雑然とした感じで受け取られている地域のように思われます。ところが、このような雑然とした風景が絵に表現されると大きく違って見えるから不思議です。絵の中の北浜漁港は夕日に照らされ、何十艘となく漁船の並んだ漁港が、昼間の喧噪の余韻を残しながらも明日への活力を秘め、一日の疲れを癒しているかのような感じを覚えるのです。風景画を見ながら感じるのは強烈な人間臭さといった思

いです。

さらに禎瑞周辺の水辺の景観。西条の西端に位置し、豊かな農村地帯が広がる地域です。市域の中でも端の方に位置する為、ここに

住んでいる人々以外の市民には、その場所は知っていても特別に意識されないところだったように思われます。その一角に幅二十から三十メートル程の水路の合流するところがあり、ここが一枚の絵に表現されました。この絵を通して観る禎瑞は豊かな水郷に浮かぶ農

村でした。「西条にこんな美しいところがあつたのか」というのが私達メンバーの一致した最初の感想でした。もちろん絵の作者は、赤屋根を黒屋根で表現したり、全体を静かな重量感のあるタッチでまとめています。しかし、この絵は確かに禎瑞に間違いのないのです。これを契機に禎瑞出身のメンバーは鼻高々です。禎瑞ほど環境の良いいところは他に無く、人情は厚いし、禎瑞こそ西条の顔だといった趣になってゆきました。

この他にも市民の森から見た市街地の全景、加茂川の美しさを描いたものなど西条の再発見といえるものばかりでした。

『まちが美術館』がゆえに

前回の二百点の作品は、全て市内各所に展示されました。私たちが絵画を観るといふと美術館での鑑賞が連想されます。しかし市内各所での絵画の展示は美術館で観る絵とは違い、買ひ物や散歩中の日常生活の中で自然に目の中に入り、芸術文化が市民の生活レベル

の中で受け入れられたように思われます。芸術文化は美術館に行つて鑑賞するものという感覚から、

日常の生活の中に絵があり、心をなごませてくれる。こんな非日常的ゆとりが、一時的にも演出できたいように思われます。

絵のテーマも西条にちなんだ身近なものであった関係から関心を呼び、市民の反応も展示と同時に実施したアンケートから大変好評だったことが伺えます。

勿論良いことばかりではなく、主催する側と観る側と描く側の三者の内、描く側には申し訳ない事もあります。絵画を通じた作者の自己表現は、それなりの舞台設営があつて初めて観る側に効果的なインパクトを与える場合が多々あるからです。具体的には、照明の具合や作品と目線の位置、そして作品の背景などです。日常性の中での展示の場合、作品が足元に見おろす位置にあつたり、作品のすぐ横に赤い服が置いてあつたりもします。作者には大変申し訳なく、今回も極力気をつけていきたい問

題であります。

こころのまちづくり

(社)西条青年会議所は二十才から四十才までの青年経済人で構成する団体で、「人づくり」「まちづくり」を目的とするものです。発足当初より一貫して『明るい豊かなまちづくり』に向けて活動し、本年は創立二十周年を迎えました。

「豊かなまちづくり」も時代とともに、その内容を変化させてきているように思われます。経済的豊かさを求める時代は一応の水準をみた現在、これからの地域住民の求める豊かさは「心の豊かさ」と考えています。人には心の潤いや情感豊かな精神の安らぎが必要です。創造する喜び、美しいと感じる喜び、他人へのいたわりの心、これらが心の豊かさだと思います。西条市では国や県からの各種補助指定を受けながら、水を活かしたまちづくりが精力的に進められています。道路や下水道などの生活基盤の整備と併せての「親水都市整備事業」(アクアトピア)や「ふ

るさとの川モデル河川事業」などがそれです。

私たちは、このようなハード面におけるまちづくりに「こころ」を加えた「明るい豊かなまちづくり」を、この『まちが美術館』事業を通して推進していきたいと考えているのです。

そういった意味でこの『まちが美術館』は、油彩画の公募、審査、賞の授与、一般への公開展示といった一連の流れが全てとは考えておりません。

応募作品の制作取材の為に西条に來られてキャンパスを広げる画家の方々と市民との交流も考えられます。公募活動を通じ、西条市のPRも行われます。

他に、この事業に関連した各種の活動も予定しております。作品の選考をお願いする著名な審査員の先生方による来西機会を拝借しての講演会や、市民と直接お話し頂ける歓迎レセプションを予定しております。又、「絵になる街」を標題にした「クリーン西条」運動の推進。これは、この事業のP

Rポスターの図柄入りゴミ袋を一般に配布して環境美化を呼びかけようとするものです。その他、伊予の青石を使ったモニュメントの設置や商店街での大壁画作成も進めています。

これらの事業は地域の人々や行政の御理解はもとより、個人、企業の御支援、そして全国の絵画関係者の御協力があつて初めてなされるものであり、この誌面をお借りして深く感謝申し上げます。

十一月二十二日から市内展示には、ぜひ西条に足を運んで頂きますよう御案内申し上げます。

詳しい内容につきましては左記にお問い合わせ下さい。

(社)西条青年会議所

☎ 〇八九七―五六―三三三八

特集

魅力ある都市景観の

創造を目指して

今治市役所

浅川 文雄

〈はじめに〉

近年、人々の価値観やライフスタイルが大きく変化し、社会も、生産中心から生活重視へと方向転換が進む中、生活そのものの質の向上、特に、日常生活の中に、潤い、安らぎ、美しさといった文化的要素が求められるようになってきました。

今治市では、こうした時代の潮流に対応し、市民がより楽しく、より快適に生活し、誇りや生きがいを実感できるまちづくりを目指し、生活環境の整備やライフステージに応じた健康福祉の充実、教育、文化の振興を図るなどハード、ソフト両面から幅広い施策を展開しています。

本稿では、「魅力ある都市景観の創造」に向けての取り組み状況についてご紹介したいと思います。

〈まちの顔づくり〉

今治市では、中心市街地を本市の顔にふさわしい魅力ある空間として整備するため、昭和五十九年度に、四国で初めて建設省の都市景観形成モデル事業を導入し、メインストリートの緑化、カラーブルック化などを進めています。これまで、今治駅から今治港に至る一、五キロメートルの「くすの木通り」をはじめ、「けやきの並木みち」「やなぎの並木みち」などの特色ある街路が整備され、周辺環境にマッチした街灯やベンチ



「柳の並木道」

などと相まって、街並みに個性と風格を与えています。

また、染色排水などで汚濁していた市街地を流れる泉川と金星川の浄化作戦を展開し、清流を復活させるとともに、親水広場を整備し、今では鯉の泳ぐ憩いの空間として地域住民や買い物客等の好評を得ています。

このほか、橋のデザイン化や市営住宅壁面へのレリーフ設置、広場への彫刻の設置など魅力あるま



「橋のデザイン化」(城東橋)

ちの顔づくりに努めています。

〈デザイン会議の設置〉

いわゆる「行政の文化化」を進める一環として、昭和六十一年度に、今治市デザイン会議が発足しました。本会の役割は、市が作成、設置するポスター等の印刷物、看板等の標示物、公共建築物、更に民間建築物等の文化的、美的向上を図るため、各課からの要請に応じ、各種デザインを審議、検討す

るとともに、既存の公共施設や生活環境について再検討を行い、問題を提起したり改善策を取りまとめることです。

当初は、絵画や写真、書道、建築デザインその他芸術文化に造詣が深いと自負する職員やひとや物言わずにおれない職員の十七名の委員で発足し、手さぐりで各種デザインの向上を図るべく奮闘していました。その後、昭和六十三年、民間の有識者（画家、デザイナー、彫刻家、陶芸家ほか）八名の方々に特別委員として参画頂き機能の充実を図り、以来「文化的なまちづくりの推進」に大きな役割を果たしています。

〈民間建築物の美的向上〉

魅力あるまち並みの形成に向けて、民間サイドからの取り組みを促進するため、昭和五十九年に「建築協定条例」を制定しました。これは、住宅地としての環境や商店街としての利便性の維持増進を目指すもので、これまでに一地区ではありませんが、本協定により、優

れた住宅環境が形成されています。

また、昭和六十二年度には、都市の景観に対する市民意識の高揚と建築文化の水準を高めるため、四国で初めて「都市景観建築賞」を創設し、魅力あるまち並みの形成に寄与する優れたデザインの民間建築物を顕彰することと致しま



「都市景観建築賞」に
選定された建築物

から港に至る地区内において、一定の建物等を新築あるいは増改築する際、計画の段階から色彩、外観デザイン等について助言、指導を行ない、今治らしい環境に調和したまち並みづくりを誘導していくこととしています。

を見せています。

また、鉄道の高架化に併せて実施している駅西地区の土地区画整理事業も用地の先行取得を終え、駅東地区では、都市再開発事業が計画されています。

一方、海の玄関口今治港周辺では、「ポートルネッサンス21」と銘打った再開発構想も進められ、海・陸の玄関口が一新される日もそう遠くありません。

しかしながら、真に今治らしい魅力ある都市景観の創造は、一朝一夕にできるものではなく、永い年月と行政のたゆまぬ努力、そして何よりも地域の構成員である個々の企業や住民の協力が不可欠であると思います。今後とも互いに連けい協力しながら、二十一世紀の架橋都市にふさわしい先進的な都市整備に努めていかなければならないと職員一同決意を新たにしているところです。

〈おわりに〉

した。そして、市民からの推薦に基づき、先に紹介したデザイン会議が審査を行ない、既に十五の物件が賞の選定を受けています。

更に、平成二年度には、「都市景観形成誘導要領」を制定し、歴史的環境を保全すべき今治城周辺地区、並びに市の玄関口である駅

これまで市街地の中心部を横断し交通の障害となり、健全な市街地形成を阻害していた鉄道を、延長二、六キロメートルにわたって高架化する「予讃線今治駅付近連続立体交差事業」がこの程完成し、近代的なデザインの新駅舎も偉容

特集

「壁画の島」

関前村

関前夢俱樂部

吉田 光枝

夢俱樂部から

事の起こりは、かれこれ五年くらい前だと思えます。私達、夢俱樂部の話し（といっても別に堅苦しいものではありません）の中で、「島の中にたくさんあるコンクリートの擁壁に絵を描いたらどうだろう」という話題が出た事です。いつものことながら、「またそんなこと言って、夢俱樂部らしい……」と思った私。そんな私の思いとは関係なく、「それ面白い」「でもお金かかるで」「たくさんさんの絵を描いて壁画の島にしよう」などと話がけっこう盛りあがった様な記憶があるのは私だけでしょうか。

夢をアートに

それから一年程過ぎた頃、関前村役場で、コンクリート擁壁に絵を描くという計画があるとの情報

が。ずっと心の中に壁画の事を温めていたYくんは、それなら我々夢俱樂部がと、早速役場に交渉にでかけました。その結果、壁画製作の企画・準備を私達がすることになったのです。そして、壁画に関する資料や情報集めに本格的に取り組みました。ちょうど近くでは広島市で壁画製作をしている事を知り、会長も広島へ行って現場を見せてもらい、関係者の方の話も聞いてきました。その結果、実際に絵を描く前の、下地処理までの工程がかなり大変だという事が分

かりました。やはりそう簡単にはいかないんだということを改めて感じさせられました。

それでも自分達でやり始めた事なので、途中で投げ出すわけにもいかず……。「こんなことで本当にできるのかなあ」と不安の方が大きくなっていました。

きたという感じでした。

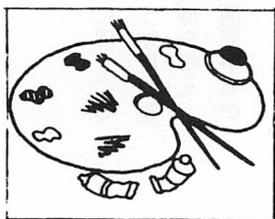
壁画製作の四日間

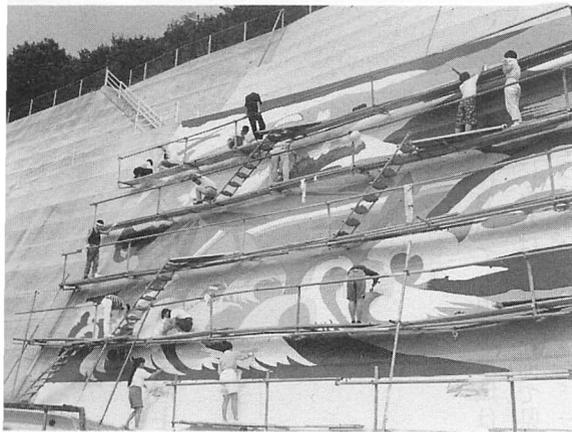
それからまた月日は流れて、十年の夏、壁画を描くコンクリート壁の場所や大きさ、作業日程も決まり、絵を描く日程に合わせて、現場の足場組みと下地処理を専門の業者さんにしてもらいました。

八月七日、今治北高校の小田先生と美術部の生徒さん、新居浜工業高校の秦先生（この方は小田先生の友人で快く協力してくれたのです）と美術部の生徒さん、松田社長さん達が来村。「ようやく壁画を描けるようになったんだなあ」と実感しました。

次の下絵はどうするかという問題が出てきました。「自分達で描く」「一般の人から募集する」「誰か画家に依頼する」などありましたが、なかなか良い案が思いつきません。そんな時、今治市内の建設現場の浪板のバリケードに絵を描いている今治北高校の美術部の生徒達を偶然に見た事から、トンネルを抜け出す事ができました。今治北高校美術部顧問の小田先生に出会えた事は本当にラッキーでした。小田先生に壁画の相談をしたところ、先生と美術部の生徒さん達が壁画製作に協力してくれることになりました。そして、絵の題材は岡村島に昔から伝わる悲話「お汐亀松」に決定しました。いよいよ壁画製作の実現に近づいて

八月八日、まずは下描き。二五m×一〇mという大きさの白いキャンパス（下地処理された部分は真白）に、黒い線で序々に下描きができていきます。小田先生や秦先生の指導のもとで高校生達はとても上手に描いていました。私が予想していたよりも





随分早く下描きができた様です。「見ている分には簡単そうだけど難しいんだろうなあ。私にはとてもできそうもない」と思いました。八月九日、十日は彩色と仕上げ。白い壁面のキャンバスに下描きの黒い線のみだったのが彩色されていくにつれてどんどん変わっていきます。原画で見た色以上に鮮やかな感じでした。彩色の時には、松田社長さんがつきつきりで色の調合をして下さいました。私は下から見るだけででした。(実は絵を描くのは苦手で、色彩感覚もよくないので...) そのうち小田先生

と秦先生のすすめと、夢倶楽部のメンバー達も描いていたこともあり、「じゃあ私も少しだけでも描いてみよう」と、塗料の缶とハケを持って参加しました。組まれた足場が上がると、けっこう高いし傾斜もあって、下を見るとかなり恐かったのを覚えています。「みんなこんな所でよく描いてる!」と思いつつ、まずはトライ。初めは簡単な所から色を塗りました。やり始めると今度はけっこう面白くなって、すっかり楽しんでしまいました。こうしてとても暑い四日間、たくさんの人達の手によってようやく壁画ができあがりました。完成した壁画の前で全員の写真。みんなのVサインとバンザイは当然のことです。本当にみなさん、お疲れ様でした。

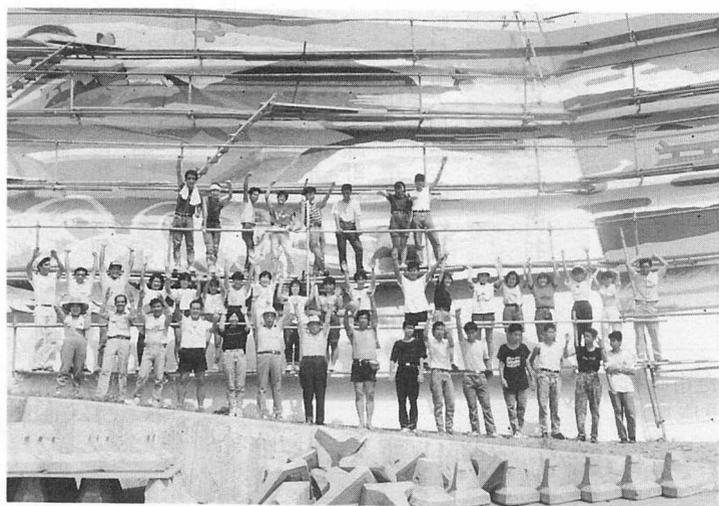
壁画の島に

完成した壁画をみる度、私は自分の描いた部分を必ず見ます。そして、絵全体からすればほんの小さな一部分だけど、確かに自分で描いた所があるというだけで、な

んだかとてもいい気分になります。ほんの少しだけ描いた私でさえこう思うのだから、一生懸命に描いていたいただいた先生方や高校生のみんなは、もっと深い思いがあると思います。高校生活での良い思い出のひとつになってくれていて、思います。これをきっかけにして、また島にも遊びに来てほしいとも思っています。

今回の壁画製作にあたっては、村内外のたくさんの方々にお世話になりました。決して一人や二人ではできなかった事です。当然ですが多くの人に支えられ、助けられて完成までこぎつけたのです。でもこの壁画はまだ出発点にすぎません。「壁画の島」の夢に向かってはまだまだ始まったばかりです。これ一回きりで終わってしまったてはいけません。さしあたり、今回都合で一部省略された部分を描き加える事が当面の目標です。準備、その他予算等、クリアしなければいけない事はまだ山積みです。一度やった経験を生かして、前回以上にいろんな人達といっ

しょに、特に地元の人達ももっと巻き込んでやれるように工夫したいと思っています。あの九十年夏からもう二年余り。月日の経つのは本当に早いものです。壁画は今も瀬戸内の海を見つめています。



過疎地域の再生について考える(II)

過疎地域の重要な機能

松山大学経済学部長 村上 克美



愛媛県においても過疎地域はトータルにみれば、様々な面で県のかかなりの部分を占めている。一九九二年現在、過疎地域に指定されている市町村数は四三で、これは県の市町村数の六一%に相当する。九〇年データでは、過疎地域の総人口は二九三、六四四人で県人口の一九%にとどまるが、総面積では県の過半を占め五七%になる。過疎の市町村の多くは、もと

もと農林業を基幹産業とする地域であり当然ともいえようが、経営耕地面積(四九%)、林野面積(六一%)、農業就業人口(四六%)、第一次産業総生産(八九年、四七%)等の対県シェアにみられるように、第一次産業に関連する指

標を中心に、過疎地域のシェアはかなり大きく、軽視できないことが分かる。

ところで過疎対策によって、過疎地域の農林業の地位は上昇したのであるうか。山村に典型的にみられるように、過疎地域には傾斜地の棚田、谷間の狭隘な水田、住宅からの距離が遠い田畑など一般的に様々な面で条件の良くない農地が多い。いわば過疎地域の農業は限界地的性格が強く、本来的に効率性、収益性のモノサシにはなじみにくい産業なのである。にもかかわらず、高度成長期以降一貫して、とりわけ食糧法の改正、農産物の輸入自由化枠拡大など内外から日本農業への圧力が増幅する

中で、過疎地域の農業に対しても地域的ハンディを無視して一律に、国際競争力や高収益性が要求されてきた。その

表1 愛媛県における高齢者比率の高い町村

順位 (1990年)	市町村名	高齢者比率 (65才以上人口比率)			人口減少率 (1970~90年) 順位
		1970年	1980年	1990年	
1	関前村	17.1%	25.3%	35.6%	10
2	大三島町	16.3	22.6	32.0	13
3	柳谷村	15.2	21.0	31.3	4
4	瀬戸町	15.9	20.8	29.2	9
5	広田村	13.8	21.5	28.8	6
6	上浦町	15.9	19.7	28.7	17
7	美川村	13.1	19.0	28.4	3
8	魚島村	14.1	18.1	27.6	8
9	河辺村	11.7	17.2	27.4	7
10	面河村	13.2	19.8	27.3	2
11	吉海町	15.9	21.2	26.9	—
12	中島町	14.5	18.6	26.5	15
13	三崎町	13.6	19.2	26.45	11
14	明浜町	13.9	19.6	25.6	—
15	小田町	11.7	17.1	25.1	12
県平均		9.4	11.6	15.4	/

出所 愛媛県統計協会『統計から見た市町村のすがた』(昭和49年度版・平成3年度版)

上、八〇年代に入って死亡者数が出生者数を上回るかたちの人口減少、いわゆる自然減過疎を発生させるほどに高齢化が一段と進行し、過疎地域の農林業の担い手不足は極限に近づきつつある。愛媛県においても、過疎地域の高齢化は深刻である。九〇年の高齢者比率では、全ての過疎町村が県平均を上回っており、二五%以上の超高齢化町村も人口減少率の目立つ過疎

町村を中心に一五を数える。(表一参照)。このような農業の諸環境や主体的条件の悪化のもとで、将来に展望をもてない農家が増え、耕作放棄が目立つようになった。とりわけ、この五年間の耕作放棄地の増加は著しい。農業就業人口の減少率(一九七〇―九〇年)も高く、二四の過疎町村が県平均(四三%)を上回り、そのうち二町村は九〇%以上の減少となった。また、第一次産業総生産について、七〇年と八九年を比較してみると、県内の過疎町村のうち対県シェアが増加したのは九町村で、他の多くの町村はシェアが低下している。

この間の県の第一次産業総生産の全産業総生産に対する比率が半減したことを考慮すると、全産業からみてシェアが増加したと思われるのは二、三の町村のみとなる。いずれにせよ、過疎地域の農林業は一部の例外的なケースを別にすれば、その地位を大幅にダウンさせ、総退却ともいえる状況なのである。こうした中で近年、大都市を中心に、その住民のための廃棄物処

理施設、福祉施設等が高地価や用地不足、とりわけ住民の強い反対で建てられず、結局遠く離れた過疎地域に設置される現象が増えてくる。四国地域にも、こうした事例がある。『大都市からのオーバーフローは生産やエネルギー分野から生活分野に広がってきた』といわれるように今後さらに都市の高齢者施設、医療施設、子供の教育施設などの過疎地域への分散が予想される(安東誠一『地域経済改革の視点』中央経済社、一九九一年、一〇ページ)。原子力発電所等エネルギー関連施設の誘致や外的的リゾート開発の経験から明らかのように都市部から「オーバーフロー」した施設は農林業や地場産業との関連効果も地元への雇用効果も極めて小さく、過疎の農山村の再生に寄与するとは思われない。長期的にみれば迷惑、危険や経済的負担だけが残ることにもなりかねないのである。

「農林業は日本の農業生産を行いながら、同時に国民が不可欠とするさまざまな公益的機能を生み

出している。自然・国土保全機能、人格形成・教育機能、保健・休養機能等がそれである」(農村開発企画委員会「ドイツ連邦共和国の条件不利地域対策」所収の永田恵十郎論文『農村工学研究』四九号、一九九一年)。「森林が人間の精神・肉体両方に働きかけることによって豊かな人間性の育成と向上に寄与し、人間生活の福祉と健康とに効果のあるもので他の何物にも置き換えられない森林に固有な本質的な効果である。快適性、保健、風致、教育などがこれに相当する」(只木良也『森と人間の文化史』日本放送出版協会、一九八八年)等と指摘されるように、農林業や森林・耕地は単に食料や資源を供給するという役割にとどまらず、本来的に多様な機能を果たしている。しかも、教育・教養機能、保健・休養機能などは代替不可能な、いわば、かけがえのない機能である。水田の国土保全(治水)の機能など他の政策手段(ダム等)で代替しうるものでも、比較すれば水田がはるかに経済的と

いう試算もある。いずれにせよ、農山村は農林業を基幹産業とし、森林等を育成することによって、国民的に重要なかけがえのない機能を果たしていることになる。様々な意味で危機的状況にある過疎地域の農山村も当然に、こうした面ですべて貢献をしていることも明らかである。問題となるのは国民生活に不可欠な機能を維持するためのコストが農山村や農林業のみの負担となっていること、過疎地域についても例外ではないということである。

「過疎化する源流山村の自然や山河を生産的に守ることの大切さ困難さは国民一般にもますます理解され難くなっている」(乗本吉郎『過疎再生の原点』日本経済評論社、一九八九年、二四七ページ)といわれるように、近年、農山村や農林業についての無知や無理解が拡がっている。それ故、都市住民とりわけ青少年に農林業の現状や過疎地域の重要な機能について正しい理解を得ることが過疎地域再生のための前提といえよう。

再生のための前提といえよう。

第八回水郷水都全国会議

水一流れが交わり、文化が生まれる



研究員 国田 敦彦

▽ はじめに △

第八回水郷水都全国会議が、夏真っ盛りの八月一日から二日にかけて、新潟市で、全国各地の水環境の保全・再生に取り組んでいる七十団体、約七百人が参加して開催された。

この水郷水都全国会議は一九八四年、琵琶湖の環境対策に取り組む滋賀県の呼びかけで開かれた「第一回世界湖沼環境会議」で採択された「琵琶湖宣言」の精神を実現するために、この会議に参加した国内の住民運動の代表者たちが話し合い、結成したものです。翌年の一九八五年に、松江市で第一回全国大会を開いて以来、土浦市、富士市、中村市、柳川市、小山市、高槻市と毎年開催されてきた。

この大会は開催地で進められている住民や自治体の運動を鼓舞する結果をもたらし、たとえば六道湖・中海の淡水化中止の決定などに影響を及ぼしています。

大会の討議で取り上げる水環境も、湖沼をはじめ河川、海域、都市、

地下水などと、年々その対象を拡大しており、その討議を通じて「親水権の思想」など、運動の基盤となる価値観の内容も豊かになっている。

▽ 「阿賀に生きる」 △

水郷水都全国会議に先立ち、映画監督佐藤真さん等七人のスタッフが三年間阿賀野川流域の民家を借り受け、阿賀野川流域に生きる人々の生活と暮らし、文化を撮り続けた記録映画「阿賀に生きる」が上映された。

地元の人たちは、阿賀野川のことを親しみを込めて「阿賀」と呼ぶ。この映画の主役はその「阿賀」に生きた三組の老夫婦の毎日の生活や「阿賀」流域の美しい自然であり、それは我々に何か郷愁を誘う映像であった。

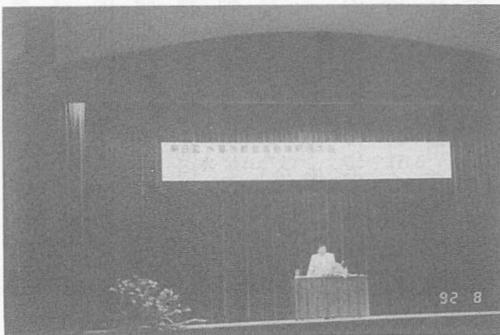
しかし、一方ではこの「阿賀」が、今なお訴訟の続いている新潟水俣病の源であるという現実も映しだしていた。

▽ 基調講演 △

この新潟大会の実行委員長であり、新潟大学工学部教授の大熊孝

氏より「水辺づくりの原則」と題して基調講演がなされた。

氏によると「自然というところの自然を思い浮かべるが、この地球にはもはや限られた所にしか存在しない。自然の循環、発展を損なわない限り人間の介入があっても、それは自然なのである。いわば人間と自然との交流があつて始めて自然が存在し、自然が美しく保たれるのである。ところが、近代的科学技術が発達して以後、我々は自然を克服と利用の対象と



してしかみてこなかった。克服と

は自然災害に対する克服であり、

利用とは資源の収奪と廃棄物の投

棄などである。地球規模での環境

問題が取り沙汰されている昨今、

この問題は今一度反省して考えて

みる必要があると同時に、今後は

再び自然と人間が交流して生命が

豊かに循環する自然を残していく

必要がある」ということであつた。

我々は、自然といえば人の手が

入っていないものと思いがちであ

る。しかし、良い意味での自然へ

の接触、すなわち人間と自然との

交流という点を考えれば、自然へ

の介入も必要であるということ

ある。

以上のことを前提に考えた水辺

づくりの原則とは何か……?

・水辺周辺の土地を可能なかぎり

公共用地として買取

・生物にやさしい工法の採用

・水辺に必然性のあるものは人工

物でも尊重

・水辺に必然性のないものは、水

辺の生態や景観を良くすること

・水質を泳げるほどきれいに

▽ 分科会 △

分科会では、第四分科会「水と

ともに生きる文化と生活」と第七

分科会「水辺を生かした都市開

発・地域づくり」に参加した。

二つの分科会の事例発表の多く

は、水辺環境を良くし、未来へと

引き継いでいくために草の根で活

動しているボランティアの人であ

り、やはり我々が生きていくため

に欠かすことのできない『水』に

ついて、多くの人たちが関心を

持っているのだということを超た

めて認識することができた。

第四分科会では、湧水の復活の

ための運動や、今ある東京の井戸

を残すための運動、さらには水辺

の景観を良くしたり、再認識した

りする生活に密着した事例が発表

された。

第七分科会の多くの事例発表の

中で、地元新潟市の掘割復活への

運動をしている事例が紹介された。

日本第一と第三の水量を誇る信濃

川と阿賀野川の河口の街・新潟市

古くから「水の都」として栄えた

所であるが、昭和三十九年に埋め

立てられ、今その面影はなくなっ

ている。この掘割を復活すれば、

観光資源として、また市民の憩い

の場となる親水公園として、大き

な財産となるであろうということ

であつた。

また、新潟市には信濃川と阿賀

野川を結ぶ運河があり、この運河

を利用して水上バスを運航すれば、

観光資源となるのではという提案

もあつた。

新潟市には信濃川、阿賀野川と

いう日本有数の大河があるにもか

かわらず、「水の都」というイメー

ジはなかつた。掘割や運河といっ

たものをうまく開発すれば、「水

の都」として新たな新潟市へと生

まれ変わるのではないだろうか。

▽ まとめ集会 △

各分科会のまとめが発表された

後、第八回水郷水都全国会議・新

潟宣言が採択された。

折しも、六月にブラジルで開か

れた「地球サミット」後の地球環

境問題注目の中での会議であつた

が、各分科会で見られた特徴は、

ほとんどが住民による環境保全活

動などの内容発表の中で、住民と

行政が協力して、新しい自然環境

創造に向かっている事例が報告さ

れたことである。

空気と同じように、まだまだ無

尽蔵の資源であると思われてはい

るが、人間にとって欠かすことの

できない『水』の存在と我々の暮

らしに潤いと安らぎを恵んでくれ

る重要性を新めて確認した大会で

あつた。



日本第一の大河「信濃川」

新しい出会いを求めて

全国自治体政策研究交流会議 &

全国自治体学会から

研究員 上ノ田 誠一

加賀百万石—金沢。前田家十四代二百八十年にわたって築き、受け継がれた風格を今に伝える。加賀友禅、金沢漆器、金箔工芸等、

歴史を超えてさまざまな文化が息づくとともに、雅を伝える伝統工芸のまちともいえる。金沢は、そうした歴史的特性をふまえ、全国に先駆けて昭和四十三年に伝統的環境保存条例を制定し、開発と保存の両立を図りながら学術文化都市づくりを進めている。

そんな金沢で残暑厳しい八月二十八日(金)から二日間開催された第九回全国自治体政策研究交流会議と第六回全国自治体学会に参加しましたので報告します。

自治体政策研究交流会議

現在、「デザインの時代」といわれ、多方面でデザインという言葉をよく耳にし、実のところ私たちも分りきったように口にする。

デザインは、一般的にモノの色彩や形状を示す「意匠」というようなニュアンスで用いられてきましたが、近年「暮らしをデザイン

する」「地域をデザインする」というように、その範囲や内容は拡大傾向にある。

そうした時代の背景からか、本会のテーマは「生活文化の創造と地域デザイン」としている。法政大学の清成忠男教授は、「今は、生活者が自立的にデザインする時代であり、生活用具等をデザインすることが必要である」と我々日常生活のあり方に一石を投ず。また、そうすることが、新しい生活文化と生活産業の創造に結びつく」と述べられる。生活者が学習から創造へと発展するために地域デザインと結びついた生活学習推進の必要性を説き、行政はそうした活動をどう支援すべきかが重要かつ課題であると指摘する。

生涯学習は、ややもすると個人の趣味や生き甲斐づくりに終始しがちであるが、推進体制の確立やどう専門的講師を地域にインプットさせていくかによって、地域住民を感化し、ひいては地域をデザインすることも可能である。また、地域住民のデザイン感覚やデザ



イン心を醸成するような行政努力、つまり行政の文化化が不可欠であるとも感じた。

事例発表者の一人である(財)金沢コンベンションビュローの西村稔常務理事は、地域デザインについて次のように語っている。「その土地でなければできないことを表現することから始まり、何がある土地を代表するコト、モノのなかを見極めることが大切である。そのことが地域特性なのだろう」と。また、創造するということについては、「過去を振り返り、掘

り下げるといふことにほかならない。どのように歴史に風を吹かせるか、その「し」かけが「創造である」と。

お二人の話しを総括すると、我々が日常生活の意味を考え、価値、質的レベルの変容を追求しながらそれぞれの町の宝物を掘りおこし個性を創れということだろうか？今更述べるまでもないが、日常生活の中に心を取り戻すことが文化を育むということだとすれば、今後、価値ある日常生活が問われてくるということになる。

今一度、文化、デザインとは何か？理解せよと悟してくれた一時であった。

例の如く、夕方からは、情報交換会。自治体職員も市民も学者も共に情報交換とネットワークづくりを目指し、参加者は目を輝かせている。日頃自分達がやっている、あるいはやろうとしている自信の現れであろうか。エネルギーに満ち溢れている。こんなエネルギーが地域を輝やかす源泉だろう。

自治体学会

前日行われた交流会議に引き続き、実務と理論の新しい出会いを求めて、人と人、自治体と自治体さらには、公と私の間での交流と連携の更なる拡大を目指し、学会が分科会形式で開催された。私が出席した分科会は、「農山村経営にどうかかわっているか」をテーマとし、九十年代を担う新しいむらおこしについて考える部会であった。

宮城県中新田町からは、子供達に質の高い文化に触れさせたいと



の思いで音楽を選び、「パッパホル」を建設し、それを核としたまちづくりや「新あゆの里構想」「αプロダクション構想」「国際科学芸術村構想」からなる宇宙村構想

など個性的で独創的なまちづくりの事例が。人口(二万二千人)より牛が一萬一千頭多い北海道中標津からは、無添加食品を食べる会やミルク料理レストラン、アイスクリーム店や牛乳直販等の民間グループでの取り組み、行政と民間がタイアップした食生活の改善と潤いのある生活を目指した運動やリゾート型酪農村づくり等の報告が。長野県浪合村からは、四十年代から進めてきた観光開発(観光立村)から教育と文化を軸とした教育立村への政策転換と山村の農業現場を生活の場から交流の場として再編しようとする「トンキラ農園」の取り組みが紹介された。また、本県の久万町渡部助役さんからは、過疎地域の問題点を「後継者不足」「農林業の不振」「高齢化問題」ととらへ、「今後の過疎地域は、経済政策を超えた次元で

の、社会政策的な理念に基づく施策の導入がなされなければならない時期に来ている」とこれまでの実践や山村の現状を分析し、今後の山村経営の在り方を問題提起。また、まちづくりは子や孫の将来だけでなく、世界の町を考えた視点の必要性を説かれた。それはある意味で、グローバルに考えローカルに行動する時代からグローバルに視行(視点・行動)することを意図しているものかもしれない。

今後の山村経営は、内にあっては、生活文化の創造と地域デザインづくりが、外にあっては、流域の人達との連携やコンセンサスづくりが鍵を握っているように思えた。

これからのまちづくりの方向性が少し見えてきたことと同時に、新しい出会いの生まれた二日間でありました。

参考 徳島発一地域デザインの時

代

新とくしま県民運動推進協

議会発行

見聞 スイスを歩いた二週間／見聞録(Ⅱ)

【市民倫理と生活思潮の原点】

宮本俊一

■嘆声／童話の国にきたようネ

「まるで、童話の国にきているようネ……」、スイスも一週間近いある日、Tさんが女性特有の明るい声で、歌うように皆に告げた。

チューリッヒ湖岸とその都市河川／ジール川・リマト川の勉強を皮切りに……、ライン下りの船旅。アルプスの村／ミューレン（標高／一六四〇㊦・人口／四五〇人）を拠点としたユングフラウやシルトホルン等の山巡りと、川や景観づくりを学んだ町や村。バーレンベルグ農村博物館。山岳観光の町インターラーケンの市民による清潔な都市開発等々。

スイスに着くや、私たちは毎日乗物の外に、十キロメートル位は歩く研修をこなし、各地の風物を感じてきた。次週は、チュー

リッヒ近郊の『近自然河川工法』

を勉強の後、マランスの町へ行く……。女性たちの憧れ「ハイジの村」と、ライン川を渡り「リヒテンシュタイン公園」を訪ねる……予定。

予備知識では、『スイス連邦』はヨーロッパの中央部にあり、総面積四万平方キロメートル……九州よりやや小さく、人口六、五〇万人……四国の人口とほぼ同じとか。国土の六〇％がアルプス山脈、一〇％がジュラ山脈。この両山脈にはさまれた狭くて長い標高五〇〇から一〇〇〇㊦の波うつ中部丘陵大地が三〇％の地勢という理解。地図上ではチューリッヒを核に、

乗物と足でスイスを南北に逆3の字に蛇行横断し、丘陵大地のかんまりの地方を眺めながら、北部の国境沿いや南部国境を隔てるアルプ

ス山麓等の地域……ランドシャフトを見てきた。

しかも、どこを見てもため息のする絵になる風景の連続だった。明日からはいよいよ東の国境も渡るのだ。きっと素晴らしいに違いない。Tさんならずとも、そんな嘆声を洩らしたいタイミング……。

■底深さ／感覚では不気味な国

ところが、Tさんの言葉が切れたとたん、「この頃、スイスを知れば知るほど、不気味な国と思うようになった……」と、福留所長がボソリと、いや、言葉を選ぶように呟かれた。一瞬、私は戸惑った。あれほどまでスイスを敬愛して止まない所長が……と。だが次の瞬間、私にもその表現がビタリだ……と思えた。これまで見てきた透明な美しい風景や、清潔・勤勉・質素といわれる国民性が確認できるような人びとの日常行為の見聞では、どうもスッキリしなく……モタついていた何かが、この言葉でスーッと消える気がした。

研修の間、その不思議な感じを考え続けていた私は、帰国後一番に、五十崎町／シンポの会の亀岡

世話人にその疑問をぶつけた。すると「そりや、スイスの『底深さ』を感じた人の感覚的表現サ……と、簡明な即答。「うまい……」思わず吹き、時差ボケもふっ切れ、美しい『童話の国』と呼ばれる……スイスのランドシャフトに、人びとの底深い尊敬すべき英知と努力が読めるような気がしてきた。

■川と湖／水質浄化の考え方

私たちの研修は、現地を見て歩きながら色々と感じるのが主体。そしてアドバイスの説明を受け、各自それぞれの質疑応答で「自分の勉強」をする……基本型だ。だから『スイス／川の勉強』のオリエンテーションともいふべき話も、そんなアドバイスに含まれるので油断がならない。また人によって受け取りが違うのも当然。

その一つにこんな話があった。「ヨーロッパの屋根と呼ばれるスイスは、ヨーロッパの多くの地域の水源となる。スイスの人たちは「下流の国々がどうあるか」とも、スイスからは綺麗な水を流す……という考え方で、湖や河川の浄化に取り組んでいる……」という。

その取り組みは、おいおい述べるが、徹底ぶりの一例をチューリッヒ州政府の建設管理局水域保全部の仕事で見ると、それは単に水質浄化と保全だけでなく、水力発電・レクリエーション利用などの水資源利用に加え、市民の廃棄物処理まで管轄している。日本のそれと比べれば、その真剣さが判る。(株)西日本科学技術研究所／一九八六年刊『スイスの国土開発と環境保全へのとりくみ』から援用抜粋——文責／筆者)

参考

州はカントンと呼ばれ、それぞれ主権を有する一種の独立国のような民主的共和政体で二三州あるが、内三州は半州に分かれるので実際は二六州。スイスはこうした州の連邦国家。スイス人である前にカントン人であるが政治意識。

■自己愛／自分は自分で守る

私はこの考え方に注目した。「スイスからは綺麗な水を流す」という、人びとの高いモラルに感銘

しながら、その奥底に、『下流の国々がどうあるうと』の言葉に含む、一切クレームはつけさせない！そんな強い『自己防衛』意識があるように感じたからだ。勿論、観光資源「綺麗な水」の計算もあろうが、その次元ではなく、人間の本源的な個人なら『自己愛』ともいべきもののようだ。

「スイスの人びとは、法律で守って貰うのではなく、自分は自分で守る／暮らしのように見えた」。私が友人たちに告げた報告第一声はこれだ。私は二週間の間、そのように思う場面を随所で見えた。

よく聞く話「赤信号、車が見えねば無視して渡る」など常識。日本と違うのは、「みんなが渡れば」でなく、一人でも自分は自分で守る自己責任の横断である。

一方、車は車でスピード制限無視に似た走りだが、人を見たとなん遠方からスピードダウン。信号の如何に拘らず人影が消えるまで待機。警笛など鳴らさない。驚きは自転車も同じだった。人間尊重か、事故からの自己防衛か。

「飲酒運転は禁止。でも事故さ

え起こさなければ」との話も聞く。そういえばマランス近くの村で、小学生風の子供がバイクで疾走するのを見た。年令制限は？街を歩く人びとは数人で歩いていても、立話をしてても、他の人の通行の邪魔をしないよう、気配りがある。他の人とのトラブルから自分を守るように。レストランでも列車でも、勿論、街角だつて大声の会話を聞かない。他の人たちの会話がさらに大声になり、自分たちの会話を妨害されないように。とも思える「節度」だ。

■市民倫理／自己愛の高社会化

そこで思い出すのが、前号提出／岩波新書『ルソー』に解説された：彼の人間観だ。「人間よ、人間的であれ、それがあなたがたの第一の義務だ。あらゆる階級の人にたいして、あらゆる年令の者にたいして、人間に無縁でないすべてのものについて、人間的であれ。人間愛のないところに、あなたがたにとってどんな知恵があるのか」と訴える人間観である。

その解説では、『ルソーは、人間の根本的なバネともい

「自己愛」を探究の出発点として、人間観を構成している」と説き、彼の語録でそれを克明に描いているが、私は次の三つを挙げたい。

- 一、人間は考えるためだけでなく、行動するためにつくられている。
- 二、人間を行動にかりたてるのは理性ではなく、情念である。
- 三、人間にとって自己愛は、自然唯一の情念である。しかもそれが社会化されたものとして「良心」がある。良心に導かれた理性は「善の行動」におもむく。

私の二週間が見た想いでは、スイスの人たちの自己防衛・自己愛は、まさにこの筋書きどおり社会化された「良心」となり、それが導く理性による『善の行動』を積み重ね、生活化した高いモラルの思潮を形成してきたようだ。

だから彼らの「市民倫理」は、理屈ばい気負いがなく、ごく自然な振る舞いにまでこなされているのだと考える。実に心にくい。

赤黄男につどう会

津島町 森 廉一郎

北宇和郡広見町在住の版画家菊澤尋吉画伯からバトンタッチされて、このコーナーにお邪魔することになった。

菊澤さんとの出会いは、昭和五十六年五月の「富澤赤黄男を語る会」の第二回例会であった。南予

出身の俳人である芝不器男はあまりにも有名であるが、宇和島中学で不器男より一年上であった富澤赤黄男(正三)に関しては、あまりにも知られていない。宇和島地方

の有志によって赤黄男の顕彰とその精神に学ぶために「富澤赤黄男を語る会」が発足したのは昭和五十五年十一月のことであった。

菊澤さんはその会の有力なメンバーのひとりであり、途中から参加した私とはなんとなく気が合ったのか、その後十年以上にわたってご交誼を受けている。

「赤黄男を語る会」はある事情のために、昭和六十年から休会と

なっているが、菊澤さんの骨折りで、ごく少数の人びとにより「赤黄男につどう会」が昭和六十一年に結成され、以後赤黄男の命日である三月七日には、毎年ささやかな赤黄男の研究集会が継続されている。

昨年三月以降は菊澤さんから、これもバトンタッチされて、私がかの世話人ということになり、会の名称も「赤黄男につどう会」と改められた。

赤黄男は西宇和郡保内町川之石に生れた俳句作家であるが、彼は伝統俳句に飽き足らず、俳句という形式に詩的可能性の限界を追求した人物である。彼は俳人よりも

詩人や歌人、または画家といった人たちから、より良き理解と評価を受けている。例えば、昭和六十年五月に朝日新聞社から発刊された「現代俳句の世界16」に赤黄男

が取り上げられているが、彼の作

品の序文を「天涯の虎」と題して、歌壇の大御所と聞いている塚本邦雄が寄せている。

「鮮麗にして悲愴な作品群、優雅な陰翳と苦い諷刺をひそませた作品群、殊に『天の狼』の中のそれは、新興俳句の到達した、俳諧詞章の極致と評してよからう」と賛辞を贈っている。

邦雄はまた、赤黄男が彼の句集の中に選んではいないが、そのために却って有名になった秀作についても取り上げ、次のように述べている。

「私は『天の狼』(赤黄男の句集)に対して今一つ、『天の蠍』とでも名づけた未刊句集を、ひそかに編みたいとさへ思う」

賑やかな骨牌の裏面のさみしい繪
夕焼の金をまつげにつけてゆく
昭和10年
昭和11年

翡翠よ白き墓標のあるところ
惜春の紅きものみなしたたれり
昭和13年
昭和15年

夕鳥の詩より紅く翔び去れり



稠のやみて微塵の空のこる
昭和17年

密林の詩書けばわれ虎となる
昭和18年

寒梅にあはれ鬱金の陽ざしかな
昭和19年

冬蝶の夢 崑崙の雪の雫
昭和20年

最近、ある抽象画家から、赤黄男の作品「海に沈んだ春の古代の灯を掬ふ」に示唆を受けて完成した素晴らしい抽象画の絵はがきを送ってもらったが、ここに「ご披露出来ないのがまことに残念である。次回は医学史の研究者でもある内科医清水英先生にお願いします。

我が家の上空

松山市 門田 真由美

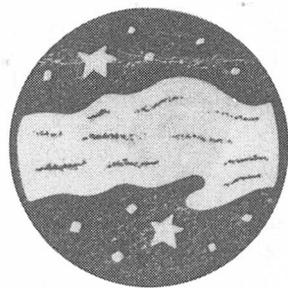
朝は、野鳥の来訪から始る。庭の中央を陣取るのは、ヤンバルクイナ達だ。勿論、沖繩のそれではないけれど、発見されて話題になった頃から現れ始め、形も似通っていたので、そう呼んでいる。子供の頃にはついぞ見かけなかった鳥だ。嘴が橙々色の上、羽は黒っぽく、大きさも中途半端、つり合いの悪さはこの上ないが、群れて土中の虫をついばんでいる姿は、ひたむきでほほえましい。

昼近くになると、塩からトンボ、赤トンボが水平飛行や宙返りを繰り返す。青い青い空は果てしない。飛行機雲がグイグイ白線を伸ばしてゆく。その先に、疎開して幼年期を過ぎた田舎がある。ぐっすり

寝込んでいるところを起こされて見た松山大空襲の真つ赤な空は、最初の記憶の始りと重なって、いっ思い出しても鮮烈だ。人類が最もやってはいけない事は、戦争だと思ふ。

夕暮になると、ピタリと風が止む。木の葉がピクとも動かない。この瞬間は、いつも感動してしまふ。自然界の理屈が不思議でしうがない。

黄昏になると、何処から飛来するのかが、こうもりの大乱舞が始る。百羽もいるだろうか。アゲハ蝶を少し大きくしたような黒いシルエットが、飛び方もよく似て、ヒラヒラ舞っている。余談だが、知人から聞いた話によれば、部屋の



隅に黒い布切れが落ちていると、つまみ上げた途端、人の顔に似たこうもりが頭を持たげたので、驚いてのけぞったそうである。

やがて、満天の星となる。気の遠くなるような時を経てきらめく無数の星を見ていると、気持がほぐれて、寛い心になっていく自分を確認する。首が折れんばかりに、振り仰ぐと、ひとときわ輝く三つの星が目に残る。天の川を挟んだ七夕の二つの星は赤い糸で結び、もう一つの星と青い糸、黄の糸で結び、美しく大きな三角形ができ上がる。蚊の襲来さえなければ、草むらに寝転んで、いつまでも眺めていたい。

先日はそんな天から、辛口の贈物が届いた。突然耳元でのドカーン、バリバリという凄まじい音で

目が覚めると、家が小刻みに震えている。翌日、クーラーがかからないことを発見して、大騒ぎになった。動力線に落雷して、高圧電流が一気に流れ、室外機の一部が焼けて溶けたらしい。おそるおそる四国電力に電話すると、「天災は保障しません」という答え。成る程。

生き物を育て、心を豊かにし、人生を考えさせてくれる大空。ちよつと度が過ぎたいたずらをしたからといって、目くじらを立てる事もあるまいと我慢することにした。

次号は、洋服のデザイナーで、話し言葉が美しく爽やかな、宮崎紀子さんに、バトンをお渡しします。



……リレーでちょっとク……

元気印レポート

狸で町を かきまわせ!

大西町 『夢遊21』

林 英司

我々『夢遊21』は、平成二年に県内でもどんじりに、大西生活文化若者塾として発足しました。

のっけから言い訳がましくなりますが、どうも大西というところは、気候・風土から経済面に至るまで恵まれ、地域や生活に関する危機感というものが無く、ことさら「まちづくり」と云っても、その意識は極めて希薄な様です。

そんな中で塾発足は、町職員を中心とする「なかよし集団」「お義理集団」となっていました。その結果が、スタートはしたものの何をどう進めればよいのか解らず、試行錯誤の連続で、えらくかけ離れた自論の発表と深い沈黙に会は終始したのです。塾生の「まちづくり」への認識ひとつとってみても、花づくり運動から政策提言集団、果てはイベント屋と千差万別なのです。

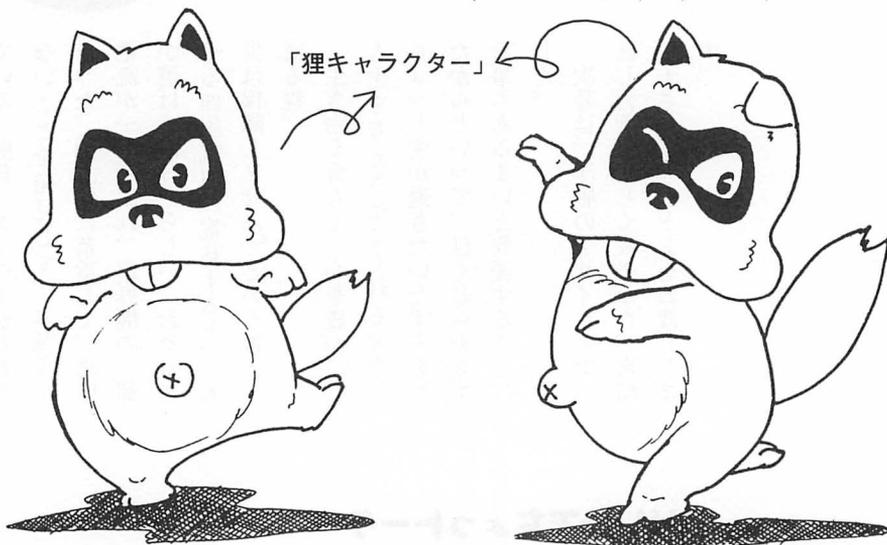
結局、三ヶ月の無駄な議論に疲れ果ててしまい、半ばヤケ気味な「とにかくどこか完璧な塾運営をしている市町村へ出掛けてみよう」との意見から、多くの関係者の方々のお骨折りにより、新居浜

市生活文化若者塾への研修が実現しました。見事なまでの塾活動、

その選定プロセスと実績、有能かつ雄弁な塾長さん、裏方に徹し大きな推進力となっている事務局長さん、そして統率のとれた組織等々、ただただ驚くことばかりでした。いま振り返っても、塾生皆新居浜市への研修が塾運営の大きな転機であったと云います。ただ、そうした体制づけられた塾運営が、結局自分達には無理との判断と「ともかくまずは行動を起してみよう」との結論から、マニュアルどおり自分達の郷土を見つめ直し、そうすることで、その中に我々がすべきことが見えてくるのではと期待したのです。

以後、地域に伝わる伝説からゴミ問題まで、ありとあらゆる情報をひとつの地図上に落とし、大西の現状を再確認したのですが、そんな中で一際光っていたのが、大西にも以外にたくさん狸にまつわる伝説があるという事実でした。

これを契機に「まちづくり」を深刻に考えるよりも、自分達が満





信楽町へ研修

足できる活動をと、塾の名称を『夢遊21』とし、マークを選定、名刺を作る一方、狸によるまちづくりの先進地滋賀県信楽町へ研修に出掛け、イラストマップの作製、狸キャラクターの選定、狸伝説を現代風にアレンジして紹介する『ポコ通信』の発刊、狸Tシャツの作製と、狸にまつわる活動を展開してきました。

こうして書くと、いかにも活発で精力的なようですが、この間に

も塾の危機は幾度となくあり、結果として塾を去っていった者も出る一方で、塾活動に賛同し、また塾を元気づけてくれるバイタリティーあふれる新しい塾生を迎えることもできました。いまだに壁にぶつかり無駄に時間を費やすことも度々なのですが、今ではそうして悩むことも「まちづくり」なのかなと自己満足しています。その打開策のひとつとして、この夏には「一度、高いところで頭を冷やし、雄大な自然の中に入れば今後の展開も見えてくるのでは」と全員で石鎚山へ登ってもみました。ちよつと調子がよすぎますが、その効果はてきめんで、いま我々は、脇目もふらず狸のぬいぐるみづくりに没頭しています。この狸で、役場や学校、駅やスーパーマーケット、飲み屋に神出鬼没し、町の愉快な噂話を引き起こし、「明堂狸（みょうどうり）たぬき」六十年復活説をぶち上げ、何とか狸を大西に根づかせたいのです。おっとこれはマル秘でした。

とにかく『夢遊21』は、若者塾

以来の「まちづくり」を使命とするといった堅苦しい重荷は降ろして、いまは和気あいあい、自分達



イラストマップづくり



完成品

の自己満足を追求し、自由に夢見て遊ぶことを楽しもうとしているところなのです。

※明堂狸

町内山之内にある明堂さんは、万病治ゆの信仰を集め、西日本一円から多くの参詣人で賑ったという。現在からは想像もつかぬ大正期の頃の話です。

元気印レポート

川之江見聞観察会

「かぁーねみてみんかい」

川之江市 曾我部 進



私達のまち川之江は周知の通り、紙パルプ工業で世界各国と交易していますが、今日のように世界第一級の経済大国となった日本には、全国各地に全世界と直接、人的物的交流を営む市町村がたくさんあります。

生産力や物流及び情報機能が、速度と密度、能率において極度に発達した現代、地方と中央及び大都市、あるいは地方と全世界の距離が短くなり、より緊密になったのですが、それにもかかわらず、一方では過疎化と高齢化による地方の空洞化が広範に、そして深刻になりつつあるのもまた事実です。無論その原因は経済的環境をはじめ

め、複雑多岐に亘るのですが、近年特に顕著となっている経済、文化、生活等、広範囲に亘る価値観の多様化、高次化とは逆に、地域文化の創造力や生活の豊かさを求める志向が中央や大都市へと向かう長年の人的物的動静が、依然として根強く続いていることも一因でしょう。確かに優れた人材の、都市から地方へのUターン現象や脱出現象が見られてから久しいとはいえ、充実した地方文化や生活環境の創造のためには、さらに様々な方法論が模索、試行されるべきでしょう。

そこで、地方の自主的、主体的な文化や生活創りを活性化するために、まず地域住民が地域の特色と魅力を探り、その身近な文化や歴史を理解しつつ生活空間を検証して、将来に亘る創造性の基礎とするような方法として、近年注目されている路上観察学を採り入れたのが私達川之江見聞観察会「かぁーねみてみんかい」です。その幾つかの成果をご紹介します。

これらの写真はごく一部ですが、こうした成果は、この夏の「四国かわのえ紙祭り」に展示されました。数多くの市民が驚きと深い関心で応えてくれたのですが、自分達のまちを新しい見方、感じ方で再発見、再認識し、それが人々の生活空間や心情に波及した効果は決して軽微ではなく、さらに拡がりをもって、将来の「我がまち」

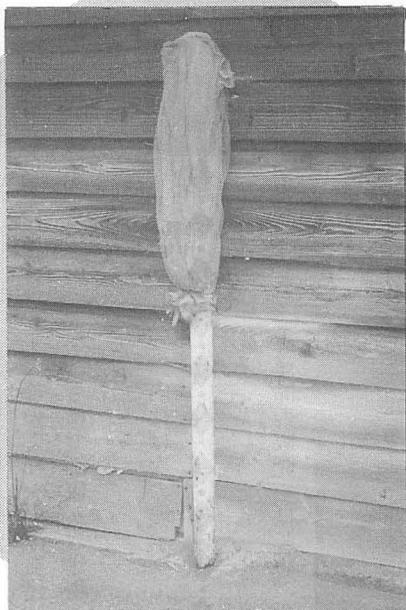


集団探索中のメンバー
(左から3番目、曾我部さん)



水路へ通じる小さな扉

エイズ予防



市内全域緑化中



創造の基礎資料として蓄積されつつあると思われます。

さて、私達のメンバーは実にユニークです。国際的な版画家や工業デザイナー、建築家、イラストレーターなどなど。それぞれの風貌といい、個性といい、活動力といい、よくもまあこれほどの人材が集まったものだとお互いに驚くばかりです。観察会の資料を点検するときなど、まるで「川之江新喜劇」の舞台そのものの体で、みんなな仕事を終えると、ギャグとユーモアのコンペのために集まるという具合で、その様子をビデオに収録しておくならば、路上観察というよりも人物観察の圧巻となること請け合いです。もちろん、まちは人によって成るのですから、そういう和気藹藹とした姿が、私達が求めた真価といつてもよいと考えています。まちおこしというのも結局人おこしですから、その点では、私達の活動は緒に付いたばかりで、これからそれぞれの優れた個性と経験を活かしてまちづくりに励むべく、そのスター

トラインとして「かあーねみてみんかい」がその活動を加速し始めたわけであります。

そして、私達は今回の経験を基礎に、さらに個性的で独創的な活動を企画しているのですが、同時に、他の地域の人々とのより広いコミュニケーションを通して、地域活性化のより優れたノウハウを創出しようと、自らを情報発信源たるべく議論百出させているのです。

「歴史資料館」 オープン

宇和島市

資料館は、明治十七年宇和島警察署として広小路に建築。その後、南宇和郡西海町役場として移築。

「農村活性化センター みかわ」オープン

美川村

我が美川村待望の施設「農村活性化センターみかわ」が、八月一日オープンしました。

この施設は、地元の農林産物の加工展示販売施設、いわゆる物産館として位置づけ、村の特産品で

そして再びこの地に復元されました。

様式は擬洋風建築に分類され、文明開化期に、我が国建築工匠達が、西欧の技術を懸命に習得した頃のものです。小屋組の合掌には隅合掌すみあわせや蕪束かぶらづかも見事にこなすなど、格調高い洋風情緒の外観と共に建築史上極めて注目されています。このような擬洋風建築は西日本にも稀で価値ある建物といえましょう。

館内には次の展示ゾーンを設け、

ある「茶、うどん、そうめん」等土産品の販売をはじめ、食堂では、

十月開館を目ざして内容の充実に努力しております。◇民俗文化コーナー◇祭り文化コーナー◇先哲頭彰コーナー◇史書研究コーナー◇全国擬洋風建物パネルコーナー◇イベントコーナー◇民俗絵巻鑑賞コーナー等。

尚、この建物に隣接した所に、安政二年築造の史跡「榑崎砲台跡」があり、現在発掘調査が進められており、この地一帯を歴史広場とする構想が進められております。

「美川」に因み、鱈、鮎等川魚料理がご賞味いただけます。また、玄関を入ったところの地元産の杉丸太の巨木は庄巻で、当センターのシンボルとなっています。

松山と高知のほぼ中間点、また、石鎚山、面河溪への入口である国道33号線沿に位置しており、松山から車でわずか一時間の距離ですので、ドライブがてら一度お越し下さい。目印は、名勝「御三戸獄」の手前で、水車と櫓上の樽です。なお、日曜日には、屋外で「ふ

乞う、ご来館を!!



るさと市」も行っており、野菜をはじめ山菜おこわ、まんじゅう等々手づくりの加工品で田舎の味が楽しめます。

紅葉の秋、石鎚、面河への行き帰りに是非共お立ち寄り下さい。
「トイレ休憩 熱烈大歓迎」





「歴史民俗資料館」 オープン 明浜町

本館には、町内の多くの方々の寄贈により、一万五千点を超す資料があります。一級品のみを並べている博物館とは趣きを異にし、

先祖の汗と脂のしみこんだ生活の知恵が伺える資料を展示しています。

中でも、海の資料として宇和海

が九月議会において原案通り可決され入居募集も間もなく始るところです。

又、4LDK二戸、3LDK四戸を有するマンションタイプの住宅の工事が七月に着工し、年度内完成を目指して急ピッチで進んでいます。

魅力ある村づくりの一環として、村営活性化住宅が先ほど村の中心部に近い肉測地区に完成しました。木造二階建てのモダンな住宅です。入居資格、家賃等を定めた条例

若者定住に向けて 村営住宅完成 別子山村

気になる家賃は、先に完成した一戸建住宅は月額二万円、鉄筋コンクリート造りの集合住宅は一万八千円と一万六千円の二タイプと、村営ならではの安い家賃です。た

漁撈用具、船舶用具、漁業標本類が八千点あり、本館のメイン展示としています。

八月一日の開館以来、町外からの参観者も多く、「他の資料館では見られない、ここ独特のものが多し」と好評です。また、展示は、本館の運営委員が当たっており、専門家のような十分な展示には至っていません。しかし、このこ

とが、かえって庶民的な資料館として地域の方々に愛されている一因ではないかと感じます。

展示資料は、縄文期のツリバリ、伊達宗城公の書簡、児島惟謙の筆跡、伊能忠敬発明の小方儀、宇和島穂積家の茶釜、江戸中期の千両箱、江戸期の虎放器の他、農林漁業用具、生活用具、石灰用具など多彩です。

是非、ご来館下さい。



だし入居資格は少し厳しく、村内で働く既婚者、転入して村内で働くこととする既婚者が対象です。

西日本一の小さな村、別子山村

で村づくりの夢を持っている方、是非お問い合わせ下さい。

(問い合わせ先)

別子山村役場 財務係

(〇八九七)六四―二〇一一

四万十川の源流に

山岳レク施設を整備

日吉村

村では日本最後の清流と呼ばれる四万十川の愛媛県側の源流、日吉村節安地区に、山岳レクリエーション施設として「節安ふれあいの森」を整備していますが、今年度からログハウス等宿泊施設がオープンしました。

「節安ふれあいの森」は、村役

ふるさと再発見・創造
フォーラム'92
参加者募集中

愛媛県

あなたの身近にありながら、つい見落としていた「面白いもの」「不思議なもの」「魅力的なもの」の発見を通じて、ふるさととの良さを再発見してみませんか。

県では、ふるさと再発見・創造運動の全体的な展開を図るため、ユニークな視点と遊び心で地域の魅力や特色を探る路上観察学の手

場のある中心地から一六km離れた標高四五〇mの高知県境に位置し、節安溪谷と呼ばれる清流と森林の豊富な山境の地に、自然を満喫し自然とのふれあいの場を提供しようとするものです。

国、県の補助事業により、体験学習施設、簡易宿泊施設が木造で整備され、宿泊施設には十人分の食器と八人分の寝具のほか、バス、トイレ、冷蔵庫、テレビ等が完備されたものが五棟あり、一棟一夜

法を用いて、十月二十二日から二十五日までの四日間、県内二十九市町村で「ふるさと再発見ウォッチング」を実施することとしました。また、この成果を活かした「ふるさと再発見・創造フォーラム'92」を開催します。

フォーラムの概要は左記のとおりですので、皆様お誘い合わせのうえ、奮って御参加ください。

テーマ◆「いきいきふるさと」再発見

予路を行く

日時◆十一月二十日(金)

五千円で利用できます。

また、観光リング園約一haに二種のリングが植栽されており、三年後にはリング狩りが楽しめるほか、観光ワサビ田二〇aを造成中で、平成五年度には、水車小屋、炭焼小屋、テニスコート、遊具等を整備し利用者の要請に応える計画です。なおお問い合わせは日吉村役場産業課(〇八九五―四四―二二二)か、節安ふれあいの森(〇八九五―四四―二九九)へ。

十三時から十七時まで

場所◆県民文化会館サブホール
内容◆芥川賞作家赤瀬川原平さん・イラストレーター南仲坊さん・漫画家杉浦日向子さんら路上観察学会メンバー六人による、県内二九市町村で行った「ふるさと再発見ウォッチング」の成果報告会。

愛媛大学の讃岐幸治先生をコーディネーターとして、



ウォッチングを通じて明らかになった地域の文化や歴史、イメージ、更にこれらを活かした住民参加のふるさとづくりを考えていくパネルディスカッション。
※入場整理券がありますので、左記までお問い合わせください。
お問合せ◆県庁ふるさと整備課
〒七九〇松山市一番町四―四―二
(〇八九九) 四一―二二―一

(内線二二三八―二二二二)

FAX (〇八九九) 四七

一二六九〇

(直通電話兼用)

へんな灯籠伊予北条 内港にて

Town タウン

パソコン通信ネットワーク

パソコン通信の 現状と課題

—アンケート調査結果から—

Vol.25

Human Communication & Network



えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

パソコン通信は、その価値を見いだした人達の間では手軽な情報収集、情報交換の手段として急速に普及していますが、一般の人達にはどのように受け止められているのでしょうか？

今回、某機関が行ったアンケート調査結果から見てみることにしましょう。回答者数は二二〇名。回答者の属性は、①性別/男44%、女52%、無記入4%②年代/一〇〜二〇代61%、三〇〜四〇代24%、五〇代以上15%③職業/学生50%、給与生活者29%、その他21%です。まず始めに、パソコン通信をした経験の有無について、「ある」人は20%、「ない」人が80%です。次にパソコン通信経験者の実態

です。①経験年数/六カ月未満23%、二年未満26%、二年以上34%、以前に利用したが現在は止めている12%②主に利用しているネット(複数回答)/商業大手ネット68%、地域のBBS45%、自治体等のネット25%、その他30%③利用頻度/一回/週26%、二回/週まで19%、七回/週まで33%、七回/週以上22%④よく利用するサービス(複数回答)/電子会議S I G 54%、データベース40%、メール38%、掲示板30%、チャット30%、ニュース等12%、C U G 10%、ショッピング10%、その他8%などとなっています。また、パソコン通信で不満に思っていることは次表のとおりです。

①利用希望

普及すれば利用したい	24%
料金が安くなれば利用したい	24%
操作がもっと簡単になれば利用したい	19%
興味あり利用したい	14%
利用しない	11%
その他	8%

一方、パソコン通信未経験者の実態では、

(複数回答)

通信費がかかりすぎる	43%
サービス料金が安い	41%
回線がつながりにくい	30%
操作がめんどう	24%
新用語がわからない	22%
料金に見合う情報でない	22%
入力に時間がかかる	37%
他ユーザーの話題に不満	9%
仲間ができない	7%
その他	9%

③有料でもほしい情報

(複数回答)

交通機関の情報	43%
雑誌・書籍の情報	41%
新商品・買い物情報	30%
福祉関係の情報	25%
新聞記事情報	20%
料理情報	19%
生活知識・健康情報	17%
資金運用情報	11%
育児	5%
その他	6%

②パソコン通信でしたいこと(複数回答)

イベント情報	57%
趣味の情報交換	40%
ゲーム	23%
新聞記事の利用	19%
リアルタイムの会話	19%
電子メールの交換	17%
ホームショッピング	12%
翻訳サービス	9%
公開ソフトの利用	7%
その他	8%

これらの結果から、今後とも操作方法や通信料金などパソコン通信の環境を改善するとともに、サービス内容の充実とパソコン通信を体験できる場を多くしていく努力が必要となります。

お知らせ

『えひめ地域づくり研究会議 92年次総会フォーラム』開催

テーマ 『ドラマはその時始まった！』

－今しか聞けない、脇役たちの裏話－

- ◇とき 平成4年11月14日(土)
- ◇ところ 松山市道後「にぎたつ会館」
- ◇主催 えひめ地域づくり研究会議、
(財)愛媛県まちづくり総合センター
- ◇内容
- 13:00 受付
- 13:30 総会
- 14:00 開会
- 『ドラマはその時始まった！』
－まちづくり人物史－
- パートⅠ 守谷和久コーナー(守谷和久VS亀岡徹)
「自由人行ったり来たり…」
- パートⅡ 若松進一の場合
「三つの顔で生きる」
- パートⅢ 岡田文淑の場合
「核心・確信・革新」
- 16:35 記念講演
「大山町 裏・表」
講師/大分県大山町ダム対策室長 緒方英雄
- 18:00 閉会
- 18:30 食談会～交歓会
- 21:00 終了
- ◇参加費 総会フォーラム 1,500円 食談会～交歓会 5,000円
- ◇申込先 えひめ地域づくり研究会議事務局まで
(財)愛媛県まちづくり総合センター内

十月も半ばになって、日中も秋の気配が感じられるようになりました。

秋といえば、食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋……いろいろあります。みなさんは、今年ほどの秋を満喫されますか？

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のM.S.(毛利・安田)まで
〒七九〇 松山市三番町八丁目

二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL

〇八九九(三三) 七七五〇

FAX

〇八九九(三三) 七七六〇

発行・平成四年十月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議